

『自壊する帝国』

佐藤優著／新潮文庫

『資本主義はなぜ自壊したのかー日本再生への提言』

中谷巖著／集英社インターナショナル

まずクイズを一つ。今年ベルリンの壁崩壊20周年だが、この歴史的イベントから20年間で欧州を中心にいくつの国家が消滅し、誕生したであろうか。(答えは註1参照)。

ノンキャリアの外交官で、現在起訴休職中の佐藤優が『自壊する帝国』(新潮文庫)の中で描いたのは、モスクワ日本大使館の三等書記官としてつぶさに見た、悪の帝国(レーガン元米大統領はこう呼んでいた)ソ連の崩壊に至る過程とそれにより誕生したロシアの混乱の模様だ。

佐藤は、当初、通っていたモスクワ大学で友だちとなったラトビア人サーシャの導きで、陰謀が渦巻く政界、官界に友人の輪を広げていくが、そのうち多くの友人はソ連の将来に悲観していた。

例えば、守旧派の共産党幹部、シュベードは1990年秋(ソ連崩壊の約1年前)、

「ゴルバチョフ(註2)はカスだ。エリツィン(註3)は権力の亡者だ。  
この国は腐り切っている。国民も腐り切っている。俺も腐っている」

と悪酔いして佐藤に絶望感をぶちまける。

筆者(村上)は、90年の夏休みにモスクワ、レニングラード(現在はサンクトペテルブルク)を訪れた際、レストランに入っても野菜がほとんど出ないことに示される深刻な食糧不足や、道端で靴を片足用だけ平気で売っていることから推測される日用品不足、そしてルーブルが暴落し、市民の間では通貨の役目を米国の紙巻タバコ「マールポロ」赤ラベルが代わりに果たしている状況を見て、ソ連は末期症状を呈していると痛感した。ソ連の崩壊は91年12月末。筆者はそれに先立つ同月第1週にはオランダのマーストリヒトで3日間にわたって開かれた欧州共同体(EC)首脳会議取材していたが、会議の主要議題は欧州統合と並んで、対ソ支援だった。ソ連は消え去り、ロシアをはじめとする12カ国で構成する独立国家共同体(CIS)が誕生したが、その当時、ECは12カ国でより緊密な統合を目

---

指しており、国家の崩壊と「統合推進による国家を超えることの模索」という全く逆のベクトルが欧州で作用している状況が印象的だった。ソ連の崩壊は「権力は腐敗しがちであり、絶対権力は絶対的に腐敗する」という英国の歴史家アクトン卿の金言を地でいったようなものだ。

『自壊する帝國』は政治など硬い話ばかりではない。ウオトカの正しい飲み方、ロシア宮廷料理の微細にわたる説明、にわかには信じがたいロシア人の性生活と肥満の関係など興味深い話題も満載で、エンタテインメント的色彩も濃い。本書は大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した。ところで、佐藤が外交官としての経験に基づいて語っているインテリジェンス（情報、諜報）論はKGBやCIA（註4）を想起させ、筆者は余り興味がない。

共通キーワード自壊で強引に結びつけたもう1冊が中谷巖著『資本主義はなぜ自壊したのかー日本再生への提言』（集英社インターナショナル）だ。佐藤の著作が「（ソ連）共産主義の死」を描いたのに対し、中谷の本は（米国型グローバル）資本主義の終焉を論じてみせたとも言えるだろう。後者は、小渕内閣時代、経済戦略会議の議長代理を務め、新自由主義に基づく改革推進の旗手であった中谷が、2008年の世界金融危機勃発による同時不況に直面して、自らの過ちを認める懺悔の書だ。09年1月にNHK総合テレビのニュースウオッチ9で紹介され、話題となった。中谷は雇用問題などで市民の連帯の必要性を強調していた。序文で、

グローバル資本主義は、世界経済活性化の切り札であると同時に、世界経済の不安定化、所得や富の格差拡大、地球環境破壊など、人間社会にさまざまな負の効果をもたらす主犯人でもある。そして、グローバル資本が自由を獲得すればするほど、この傾向は助長される。

（中略）

一時、日本を風靡した改革なくして成長なしというスローガンは、財政投融资制度にくさびを打ち込むなど、大きな成果を上げたが、他方、新

---

自由主義の行き過ぎから来る日本社会の劣化をもたらしたように思われる。例えば、この20年間における貧困の急激な上昇は日本社会にさまざまな歪みをもたらした。あるいは、救急難民や異常犯罪の増加もその負の効果かもしれない。

と述べている。新自由主義は、1980年にレーガンが米大統領に就任して以来、西側資本主義世界で主流となったイデオロギーだ。それを周回後れで採用した日本ではついこの間まで政官財学の各界で幅を利かせていたように思える。また、異常犯罪の増加についてはおそらく2008年6月の秋葉原無差別殺傷事件を念頭に置いたのであろう。

そして中谷は終章で、

本書のタイトル『資本主義はなぜ自壊したか』は過去形の表現になっているが、もちろん、資本主義が全面的に自壊してしまっただけではない。しかし、自由を満喫したグローバル資本が世界経済を不安定化させ、所得格差拡大で不幸な人々を大量に生産し、また、地球環境をもはや修復不可能に近いところまで汚染してしまったという意味で、資本主義の自壊作用はすでに始まっているというべきである。

と強調する。

やや歯切れは悪いが、中谷の言わんとするところは十分伝わるはずだ。もちろん、自壊するとすれば、資本主義というイデオロギーではなく、資本主義システムであるのは言うまでもない。中谷の主張に対しては、資本主義自体を否定することへの反発（前述のNHKニュース番組での勉強会参加者のコメント）なども出ている。



---

日本の政治の閉塞状況が続き、金融・経済危機で再び「就職氷河期が訪れよう」としている現在、技大に入学する皆さんには、近過去の歴史と現在の政治社会状況をどのようにとらえるのか、広くアンテナを張って欲しいと考え2冊を選んだ。

- 註1) 消滅した国 ソ連、東ドイツ、ユーゴスラビア連邦、チェコスロバキア  
誕生した国 ロシアやウクライナなどCIS12カ国、ドイツ（西ドイツを承継）、  
チェコ、スロバキア、ラトビア、リトアニア、エストニア、スロベニア、クロアチア、  
ボスニアヘルツェゴビナ、マケドニア、モンテネグロ、セルビア、コソボ、グルジア
- 註2) 当時のソ連大統領
- 註3) ソ連崩壊後のロシア初代大統領
- 註4) KGBはソ連時代の秘密警察、CIAは米中央情報局

## 執筆者紹介

### 村上 直久

経営情報系准教授。専門領域は、国際関係論、メディア英語論。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『自壊する帝国』 佐藤優著 新潮文庫 2008年 820円

『資本主義はなぜ自壊したのか「日本」再生への提言』 中谷巖著 集英社インターナショナル 2008年 1,785円

ブックガイド目次へ